

# インフォーマルな大学教育としての オープンキャンパス —学生の社会性育成のために—

The open campus as the informal college education :  
For developing students' socialization skills

橋本佳美, 鈴木真理子, 田中高政, 堀内ふき, キシ・ケイコ・イマイ

Yoshimi Hashimoto, Mariko Suzuki, Takamasa Tanaka,  
Fuki Horiuchi, Kishi Keiko Imai

キーワード：オープンキャンパス, 学生, 学生教育, 広報活動

Key words : open campus, student, student learning, public relations

## 要旨

大学創設以来3年間、大学の広報活動としてのオープンキャンパスを学生の社会性や自主性を育てるカリキュラム以外のインフォーマルな学びの場としても位置づけ運営してきた。この3年間を振り返って、オープンキャンパスにおける教員の課題と役割を報告する。

学生を中心に企画運営するオープンキャンパスは、学生教育の場として有効であると考えられる。このようなオープンキャンパスを維持継続していくために考慮することが2つある。一つはオープンキャンパスに参加する学生が毎回入れ替わり異なること、もう一つはカリキュラム上まだ専門科目の学習が始まったばかりの2年生が毎年運営の中心になるということである。そこで、学生が変わっても次への引継ぎができるような学生支援が課題となる。また、教員はオープンキャンパスの参加者に学生が「何をどう伝えるのか」の方向付けを行い、活動を見守り支持する役割があると考える。

## I. はじめに

オープンキャンパスは大学の広報活動のひとつとして重要な役割を果たしている。

筆者等（広報委員）は、オープンキャンパスを大学の広報活動および学生の学習の機会

として位置づけて活動してきた。それは、社会性の未熟さやコミュニケーション能力の低さが指摘され、高校生から大学生への移行のための初年次教育の必要性やその方法が検討されている（山田礼子, 2009）現代の学生に対して、日常の学生生活の中で他者と協働し

て活動する経験の中で自主性を育て、責任感を持って行動することができるようにしたいとの考えからである。開学から3年が経ち、活動意欲のある学生リーダーを中心として企画・運営するというオープンキャンパスが、学生のインフォーマルな課外活動としての学びの場となるために教員がどのように関わったかを報告する。

## Ⅱ. 大学オープンキャンパスの概要

### 1. オープンキャンパスの目的とねらい

オープンキャンパスの目的は、参加者に対しては①新設校であるために地域における「大学の知名度を上げる」こと、②大学の教育とその特徴を明確にすること、③実際の学生生活に触れることである。学生にとっては、オープンキャンパスは自分たちの学習成果や学習内容を後輩及び地域の参加者に紹介する機会になる。考えたことを実際の形にしていくな準備や当日の運営を通して、学生の社会性が培われていくこのことがインフォーマルな大学教育に繋がる。参加者にとっては、学生の活躍を通して大学の雰囲気や特徴を知る機会となり、②、③の目的が達成されることになる。

### 2. オープンキャンパスのプログラム (表1)

年3回、6、8、9月に大学キャンパスを開放して以下のような内容で開催した。参加者全員に対して、全体会として大学の概要、入

試、奨学金等について説明、在学生による学生生活の体験談や入学動機を紹介した。次に高校生をいくつかのグループに分けてキャンパスツアーおよび看護体験（学生の学習内容紹介）を行い、希望者には個別進路相談を加えた。保護者に対しては、全体会での概要説明の後、さらに詳細な奨学金、学生生活に関わる費用の説明を行い、保護者が心配していること等、具体的な質問に答える会（約1時間）を開いた。希望者には個別相談ならびにキャンパスツアー、看護体験に参加できるようにした。

## Ⅲ. 実施結果

### 1. オープンキャンパスの経過と参加者の推移 (表2、3)

#### 1) 2008年 開学時

##### (1) 学生募集方法

オープンキャンパスに参加する在学生は、講義後の呼びかけやポスター等で募集した。

##### (2) プログラムの運営と企画内容の検討

在学生が1年生しかいない状況であったため、教員主導で学生に役割と準備について説明し、看護体験、キャンパスツアーについては学生と話し合っ決めて。また、看護体験（赤ちゃん抱っこ、妊婦体験、車椅子・松葉杖体験、心音聴取）は学生が未修学であったため、事前に担当教員と学生が連絡を取りあい、事前学習を行い、説明方法を検討した。学生からは、①それぞれのプログラムの担当

表1 2010年度 オープンキャンパスプログラム

時間	内容	対象者
11:30~13:00	昼食：ランチョン懇談会（8月） / お茶会（6月、9月）	希望者
13:00~14:00	全体会：大学の概要（カリキュラム、学習内容、大学の特色等）、 学費、入試などの説明 在学生の話（学生生活など）	全員
14:00~16:00	キャンパスツアー、看護体験、在学生との個別相談（懇談会から変更）	高校生
	学生生活に関わる費用等の説明後、保護者からの質問を受ける	保護者
	個別相談、看護体験、キャンパスツアー	希望者

表2 オープンキャンパスの経過

	1年目（開学時）	2年目	3年目
学生スタッフ	1年生のみ 延べ約50名	1、2年生 延べ約80名	1、2年生中心（3年生は6月のみ参加）延べ約90名 2年生から1年生にオリエンテーション実施 学生リーダーが学生の役割や配置の決定や当日の指令塔的な役割を担うようになった
看護体験	教員主導で説明内容や方法を検討し学生は体験内容を練習して臨んだ	看護体験項目ごとのリーダーが担当教員と企画を練り、2年生の前年度の経験者が中心となり1年生を指導し、事前に練習を行った	2年生中心に運営されていた 1-2年生の話し合いや練習が不足していたこと、担当学生が固定されていないこと、教員との話し合いの不足もあり、参加者への説明内容や方法の検討・練習はやや不十分となった
キャンパスツアー	コース設定や説明内容等について、教職員が指示した	説明内容は、各学生のオリジナルで行うようになった	看護体験に時間をかけるため、ツアーコースの規模を縮小した
新しい企画・他	2回目から学習成果の展示	クラブ・サークルの紹介コーナー設置 8月：ランチョン懇談会 全体会以降の企画は高校生と保護者を分けた形で実施した	展示コーナーに教科書や授業で使用した学生の学習成果の資料などを展示 全体会開始前のお茶のサービスおよび懇親会
事前の準備状況	パネル作りや案内表示の作成は、事務職員の全面的な協力を得た。前日の準備は学生と担当教員がほぼ全員で行なった。	毎回前日から学生が中心となり、教員、事務職員が協力して準備を行った。教員の呼びかけで12月から学生有志が集まり、次年度に向けてオープンキャンパスの改善点等を話し合った	4月～6月まで、延べ30名ほどの有志が放課後等に集まり、展示パネルや会場案内表示など、繰り返し使用する物品類の準備を行った
教員の動き	学生と話し合い、オープンキャンパス運営の中心を徐々に学生に移していった	学生リーダーと話し合い、オープンキャンパスのプログラムを決定し、リーダーの動きに任せた	各会場をできるだけ分散しない場所に設置した学生に充分関わる時間がとれなかった 教員が学生に対して「参加者に何をどう伝えるのか」方向付けをする必要があった 準備の内容を学生間で伝達する方法を検討する必要もあることが反省としてあがった

表3 オープンキャンパス参加者人数

	2008年			2009年			2010年		
	6月	8月	9月	6月	8月	9月	6月	8月	9月
高校生	40	87	55	52	116	39	42	144	57
保護者	10	55	38	26	59	26	28	85	36
その他	0	6	4	6	1	2	2	13	5
合計	50	148	97	84	176	67	72	242	98
	295			327			412		

人数、時間配分の具体的な改善案、②高校生は保護者と一緒に行動すると保護者の陰に隠れてしまうので、高校生と保護者を分けて高校生向けに個別相談、懇談会（集団で高校生と在学生が話すことができる会）、看護体験が必要である、③看護体験以外のグループワークの成果や学生生活の場を見せたい等の意見が出された。

2回目のオープンキャンパスは学生の意見をもとに人員配置や時間配分、高校生と保護者を分けて案内する等の工夫がされ、学習成果や学習風景の展示が追加された。全体会以外のプログラム（キャンパスツアー、看護体験、学生懇談会）は、学生が中心となって進行的な。また、必要時学生が教員とともに進路相談を行なうなど、2回目以降のオープン

キャンパスは学生中心に運営されていった。学生からは、「今後看護の授業で学ぶことを先に少し学習し、学習に興味や関心が持てた」「実際に高校生に説明をするためには、自分が学習を深めなければならないことがわかった」という意見が聞かれた。また、「入試について、受験勉強についてなど具体的に聞かれた時に、試験問題については既に忘れていて説明しにくいので、過去問題があるといい」、「午前中からはじめてはどうか」、「模擬授業やユニフォームの試着等の企画を入れてはどうか」というような提案もあった。「暇な時間ができてしまい、とても忙しい時間帯もあり、もう少し時間配分や人員配置の工夫が必要である」という反省もあった。こうした意見、反省は次のオープンキャンパスの企画運営に反映させた。

#### (3) 教員の意見

広報委員以外の教員からは、「学生の学生生活に関するスピーチ、看護体験、懇談会での対応が良かった」、「個別相談では参加者の要求にあった具体的な相談ができていた」「毎回学生の成長が見られ、頼もしく感じた」という意見が聞かれた。

広報活動は、全学生数93名中約50名の学生が交代で参加し、学生の「新しい大学なので一緒に大学の伝統を作っていこう」というような呼びかけがあってもいい」という熱意のもと、学生が大学を広報するというオープンキャンパスの方法の基礎が築かれたということ振り返りの中で確認した。

#### (4) 参加者の反応

参加者のアンケートからは、「学生が明るく、生き活きとした雰囲気活動しているのでこの大学に来たいと思った」、「学生の説明がわかりやすく、聞きたいことが聞けた」など学生に対する具体的な評価が得られ、「もう少し学生の学びや生活の様子が知りたい」「もっと学生と話す時間が欲しい」という要望も見られた。この評価について学生に伝え

た。

#### 2) 2009年 2年目

##### (1) 学生募集方法

オープンキャンパスに参加する学生を1年目と同様に募集し、2年生から1年生に役割や実施する内容を伝達した。

##### (2) プログラムの運営と企画内容の検討

6月のオープンキャンパス運営に関する話し合いでは、学生から積極的に意見が出された。前年度サークル紹介等学生生活をもっと見せたいという思いに対しては、新たにクラブ・サークル活動紹介のコーナーが設置された。看護体験については、「参加者に学習内容をもっと見せたい」、「昨年よりも高度な看護体験を企画したい」という意見が出された。しかし、1年生にも理解でき、参加者が正確で安全な看護体験ができるようにという制約があるため、心音聴取・血圧測定、手洗い、高齢者体験、松葉杖・車椅子体験、ストレッチャー体験が看護体験として企画された。学生は各看護体験の担当者の中でリーダーを決め、担当教員と企画を練ることにした。1年生へのオリエンテーションは2年生が行なった。参加者の案内や全体の流れのコントロールも含めて学生が中心となって運営した。特に手洗いについては、インフルエンザの流行と重なったこともあり、高校生にもわかりやすい体験となった。

1回目のオープンキャンパスの運営に関して、学生は「看護体験のブースで複数のグループが重なってしまったので、ひとつの体験におよそどのくらいの時間を費やすのか、もう少し詳細な検討が必要である」、「1年生との連携をもっと良くするために、担当者間の話し合いをきちんとしたほうがいい」、「保護者への対応も必要だ」、「高校生と話さきっかけがなかなかつかめなかったので、高校生と学生を動かす司令塔的な役割が必要だ」という意見が出された。特に参加者からの「もっと学生と話したい」との要望に応えるために、

8月のオープンキャンパスでは「ランチをばさんで学生と高校生、保護者が話しをするランチオン懇談会が良い」という提案がされた。

8月の2回目のオープンキャンパスは、参加者が200名近い状況の中で、全体が混乱なく動くことができるように、受付でキャンパスツアー・看護体験のグループ分けを行なった。また、昼食時や参加者が移動する時間帯は、学生が全体の状況を掴みながら参加者を案内するように担当を決め、参加者を誘導した。高校生と保護者を分けてキャンパスツアーを行うことで、高校生が看護体験に積極的に参加できるように働きかけ、高校生が学生と気軽に話す機会をもった。

9月の3回目のオープンキャンパスは6月と同様の企画でオープンキャンパスを行なった。

### (3) 教員の意見

2009年度のオープンキャンパスは、前年度と比べて学生の考えが反映され、全体の企画や参加者の流れの調整なども学生リーダー中心に行なわれるようになった。各看護体験を担当していた教員から、1年生は戸惑いながらも2年生について徐々に自分から動くことができるようになっていったと報告された。翌年は3年生の看護学実習が始まるため、教員と学生の意見交換の時間と機会がより少なくなるのが予測された。そこで、広報委員は次年度に向けて学生の意見を聞く機会を作り、比較的学生が忙しくない時期に、準備を進めるように検討した。

### (4) 参加者の反応

参加者からはランチオン懇談会について「昼食時に学生生活の具体的な様子や受験勉強のこと等を学生に気軽に聞くことができ、その後の大学の説明がわかりやすかった」と好評であった。

### (5) 次年度に向けた準備

全てのオープンキャンパスが終了した後、次年度への準備として学生の意見を聞く会を

3月までに2回行い、延べ9名の学生が参加した。特に好評であったランチオン懇談会を振り返り、「開始時刻より早めに来校した参加者にお茶とお菓子で話しをする機会をつくる」という意見をもとにランチの提供がない6月と9月についてもランチオン懇談会にかかわるお茶会の企画が提案された。さらに、「もっと専門的な機材を展示して看護体験に時間をかけ、その場でも高校生と話しができるようにする」、「学生生活の様子がわかるようにサークル活動等の紹介をもっとしたい」などの意見が出された。この話し合いの内容は、広報委員がキャンパス見学会通信として発行し、参加しなかった学生にも話し合いの内容が伝わるようにした。

## 3) 2010年 3年目

### (1) オープンキャンパスの準備

大学開設から3年が経過し、カリキュラムは1年、2年、3年生の授業が同時進行し、学生と広報委員が直接関わることのできる時間は少なくなり、準備にかかる時間も限られてきた。そこで、キャンパス見学会に使用するパネルや表示などあらかじめ準備できる物品を時間がある学生が早くから分担して作成することにした。4月から6月初旬までに5回準備のための集まりを持った。延べ30人ほどの1~3年生が参加した。6月のオープンキャンパスまでに、学内の案内表示や学生のサークル紹介、学習成果を披露するパネル、受付で高校生のキャンパスツアー・看護体験のグループ分けをする札を作成した。この間に1、2年生の交流ができた。

### (2) プログラムの運営と企画内容の検討

大学のカリキュラム上、3年生は後期から実習に出るため、オープンキャンパスの中心となる学生は2年生であった。看護体験については前年度と同様に専門科目が未修学の1年生にも理解でき、参加者が正確で安全な看護体験ができるようにという制約があった。看護体験をレベルアップしたいという学生の

要望に対しては、広報委員がその体験は高校生に何を伝えるためのものかを考えるようにという助言をした。看護体験の内容は、①ベッドメイキング、②手洗い、③老人・障害者体験（老人体験、片麻痺体験、車椅子、松葉杖体験）、④赤ちゃん抱っこ、妊婦体験とした。また、企画、タイムスケジュールは2年生のリーダーが中心となり、担当者、各担当の責任者を決めて連絡調整を行った。さらに2年間の実績を踏まえ、キャンパスツアーのコースを縮小し、看護体験にかける時間を長くすることや、全体の人の流れや動線を考えて、展示コーナーや個別相談会場などできるだけ1つの建物（5号館）に集約する等の工夫がなされた。

6月のオープンキャンパスについては、3年生が2名加わり、2年生のリーダーを補佐した。実施後の反省会では、学生から「オープンキャンパス開始前のお茶のサービスと高校生との懇談会は好評だった」、「看護体験は複数のグループが重なってしまうので、もう少し担当者間の調整や回り方を工夫するか、看護体験を選択性にするか検討したい」、「看護体験のブースのそばに高校生と学生が気軽に話せるコーナーを作ったが、アピールが足りなくてあまり人が来なかった。でも、高校生と話す場所は看護体験の場所と近いほうがいい」、という意見が出された。3年生は2年生が1年生をうまくリードしていたと話していた。

8月のオープンキャンパスは250名近い参加者があった。学生はリーダーの指示でそれぞれの役割を果たしていた。企画したプログラムは滞りなく実施され、6月に反省点として出されていた参加者の重なりや相談コーナーの活性化はできていた。しかし、看護体験に関しては、学生の主体性に任せるだけでは限界があり、体験で「何」をやるのかという提案はできても、それを「何故」「どのように」やるかについて学生から示されることが

少ない状態であった。

9月のオープンキャンパスも2年生のリーダーを中心として運営し、全体会の司会も学生が担当した。

### (3) 教員の意見

学生が看護体験で何をどのように高校生に伝えるのかが明確になっていない状況に対して、看護体験の担当教員からは、「看護体験の何をどう参加者に伝えるのかは2年生では難しい点もあるため、教員が方向性を示して事前に学習するような援助も必要である」「毎回担当する学生が同じではないので、前回どのような意図でどのような会場を作り説明したのかなど、記録にして申し送るといような方法を取ってみてはどうか」という指摘と提案があった。

広報委員は、3回のオープンキャンパスについて、異なったプログラムで運営しても良いのではないかという意見を持っていた。特に9月は8月に比べると参加者は少なく、進路が明確になっている高校生が多いため、進路に関する相談だけでも良いのではないかと考えていた。しかし学生は、次年度のオープンキャンパスについても年3回開催すること、看護体験については、形を変えたとしても3回とも行うことが良いのではないかという意見であった。

### (4) 参加者の反応

参加者からは、「学生の対応が丁寧で親切」「大学で何を学んでいるのかよくわかった」「学生の明るさや自由な雰囲気がこの大学のよさを感じさせた」などの意見があった。

## Ⅲ. 考察

### 1. オープンキャンパスからの学生の学び

開学から3年間で、オープンキャンパスは徐々に学生が中心になって企画・運営するというスタイルができてきた。オープンキャンパスの運営という点では、学生は毎回の反省

に見られるように自分たちが考え計画したことを実施し評価するという一連の過程の中で準備の大切さを学び、お互いの交流を深めている。オープンキャンパス開催中に「オープンキャンパスが土曜日や夏休みなど学生の休日の企画なのに学生達が嬉々として働いている姿が印象的であった」という声を参加者から直接聞くこともできた。物品の準備や後片づけなどでも労をいとわない仕事ぶりからは、学生の持つ主体的な力や責任感が存分に発揮されていると感じている。また、看護体験については、「今後看護の授業で学ぶことを先に少し学習し、学習に興味や関心が持てた」というような自ら学ぶきっかけをつかみ、「実際に高校生に説明をするためには、自分が学習を深めなければならないことがわかった」と不足している学習に気付いているなど、こうした経験は学生たちの成長の機会としても貴重なものであると言えよう。

## 2. 学生が企画・運営の中心となっているオープンキャンパスの広報効果

平成9年度にはオープンキャンパスが学生募集活動に特に効果があると考えている大学は41.8%であったが、その後その効果の認識は徐々に高まり平成20年度には90.7%となっている（私学経営情報センター，2010）。本学においても年々オープンキャンパスへの参加者は増加しており（表3）、学生募集活動において少なからず効果を示していると考ええる。また、小島（2010）は、『入学後の学

生の評判が良ければ、毎年後輩が入学する傾向が全国的に見られている』、『オープンキャンパスは受験生獲得のみならず、在学生の姿を通して、雰囲気や魅力など数値や言葉で表せない大学の力を伝えることができる』と記述している。参加者のアンケートから「学生の明るさや自由な雰囲気がこの大学のよさを感じさせた」というような意見が見られたことは、まさに在学生在が大学の魅力を伝えていることを示していると思われる。また、『大学教育がマスから個に向かっている時代の中で、個の生徒に対応できるオープンキャンパスが望まれている』（私学振興事業本部，2010）などの報告がある。参加者の好評を得た学生企画のランチョン懇談会やオープンキャンパス開始前のお茶会は、この点で有効であったと考える。

## 3. オープンキャンパスにおける教員の課題と役割

学生の学びを深め、一期生が生み出した「新しい大学なので一緒に大学の伝統を作っていこう」とする姿勢を核とした、本学らしいオープンキャンパスを築き上げ、それを学生達が後輩にどのように伝達していくのが課題である。

オープンキャンパスの企画・運営を学生中心にしていくために考慮することが、現在2つある。オープンキャンパスに参加する学生は毎回同じとは限らないこと、カリキュラム上毎年2年生が運営の中心になるということ

表1 2010年度 オープンキャンパスプログラム

時間	内容	対象者
11:30~13:00	昼食：ランチョン懇談会（8月） / お茶会（6月、9月）	希望者
13:00~14:00	全体会：大学の概要（カリキュラム、学習内容、大学の特色等）、 学費、入試などの説明 在学生の話（学生生活など）	全員
14:00~16:00	キャンパスツアー、看護体験、在學生との個別相談（懇談会から変更）	高校生
	学生生活に関わる費用等の説明後、保護者からの質問を受ける	保護者
	個別相談、看護体験、キャンパスツアー	希望者

である。

オープンキャンパス運営に関する学生間の引継ぎ方法と、大学での看護教育について高校生に伝えていく方法、例えば看護体験の内容・方法などの再検討が必要である。引継ぎ方法については、学年が変わっても学生に混乱が生じないように、オープンキャンパスの運営に関する各役割担当学生の申し送り事項を記録していく方法を検討している。

看護体験等を通して大学の学習内容がオープンキャンパス参加者、特に高校生に理解できるようにするためには、教員は「それぞれの企画がどのような目的で計画されるのか、その準備には何が必要なのか」を学生自身が整理できるような方向付けをする。そして、学生が自分の力を伸び伸びと発揮できるように、教員は学生の企画が実施できるように学生を支援し、企画の実施を見守り、一人一人の学生の活動を認め支持するように働きかけることが必要である。学生が休日に自分の時間を使ってオープンキャンパスに参加し、目立たない準備や後片づけも楽しそうにしている姿は、このような関わりが重要であることを示していると考えられる。

#### IV まとめ

学生が中心となって企画・運営するオープンキャンパスは、その活動を通して学生の社会性や自主性が育成される。そして、学生の活躍は大学の魅力をオープンキャンパスの参加者に伝える方法として有効であることも確認できた。オープンキャンパスを学生のインフォーマルな大学教育の場とするためには、教員は学生の活動を方向付けること、活動を見守り支持するような関わりが重要である。

#### 参考・引用文献

- 小島理恵 (2010). オープンキャンパス考上 教育学術新聞, 第2402号
- 小島理恵 (2010). オープンキャンパス考下 教育学術新聞, 第2402号
- 私学振興事業本部 (2010). 少子化時代の学生募集活動—進学説明会と進学相談会. 月報私学 私学経営情報センター 第146号, 4-6
- 山田礼子 (2009). 初年次教育とは何か 「生徒」から「学生」にするための方策. 看護教育. Vol. 50 No. 5, 376-381